

ゼミ課題 読書感想文

『それをお金で買いますか 市場主義の限界』

北海道大学経済学部経済学科 橋本ゼミ2年 多賀俊明

はじめに

私は今回マイケル＝サンデル著作の『それをお金で買いますか 市場主義の限界』を選んだ。

本書の内容は全編にわたって、ありとあらゆるものがお金で取引される時代となってしまう現代社会に、本当にそれでいいのかと疑問を呈し、本来人間が一番大事にすべきものは何であるかを問うている。この考え方は、今の時代を生きていく上で特に必要だと思ったため本書を選んだ次第である。

本書の内容

本書は様々な事例を挙げ、市場の論理と道徳の論理という2つの論理から前述した疑問の答えを導き出そうというスタイルで展開している。

サンデルの専門が政治哲学ということもあり、本書は経済学を哲学的に捉えた場合どう見えるのかという点に主眼を置いている。そして、お金では買えない道徳的・市民的「善」がいかに重要であるかを多くの具体例を交えながら力説している。

本書は「序章 市場と道徳」、「第1章 行列に割り込む」、「第2章 インセンティブ」、「第3章 いかにして市場は道徳を締め出すか」、「第4章 生と死を扱う市場」、「第5章 命名権」の全6章から成り立っている。そして各章でさらに詳しい事例を紹介して、現代の行き過ぎた市場経済を批判している。

「1章 行列に割り込む」では、題名の通り行列という一見誰の目に見てもよくある光景に焦点を当てている。人間にとって行列に並ぶということは、自分の欲求を満たすためには仕方がないとは思いつつも無駄な時間だと感じているであろう。そして経済学的にもそれは同じかそれ以上に非効率な行為だと認識している。現在この行列には、お金を払うことで行列に割り込むことができたり、行列に並ぶ代行人をたてたりすることができるビジネスが存在する。他にも多々事例はあるが、行列を市場の中に組み込んだという話が1章ではなされている。

「2章 インセンティブ」では、金銭的インセンティブをビジネスとして用いた場合にはらむ数々の危険性について論じている。

「3章 いかにして市場が道徳を締め出すか」では、本書の内容から例を挙げると、お

金で友情や名誉は買うことができるのかという点や、贈り物の習慣の経済的意味について言及し、市場と道徳の関係性について考察している。

「4章 生と死を扱う市場」では、不慮の事故や死による金銭的リスクから家族や企業を守るためにあるはずの保険制度が、実は人の死を扱ったギャンブルと表裏一体の関係であり、今や市場原理が保険業界にまで浸透してきたことによってギャンブルと何の境もなくなっている現状を憂い、道徳的理論を全く欠いた市場の理論の残酷さを嘆いている。

そして「5章 命名権」では、今日の世界で多くの公共施設にスポンサー企業の名を冠した名称が使われ、ありとあらゆる場所に企業の広告が乱立するという、命名権や広告業といった、果たしてこうまでして金儲けをしたいのかという領域まで市場が浸透してしまったことについて、無差別的な市場の広がりやどれほど毒であるか、そして道徳的・市民的「善」がいかに重要であるかをこれまでの内容と絡めて結論付けている。

サンデルは本書で、若干の表現の違いはあるが、何度も何度も各章をまとめる際に主張していることがある。それは、市場が今までは非市場領域であった場所にまで拡大すると、そこで通用していた非市場規範（＝道徳的規範）を駆逐して市場規範を浸透させ、市場に浸食された元非市場領域は腐敗・墮落し、その本質を失ってしまうということだ。これが道徳的・市民的「善」を人間の心の中から追放してしまうと述べている。

ここでは主に、なぜ市場が非市場領域を腐敗・墮落させてしまうのかという疑問と、金銭的インセンティブの1例と生命保険に関する例という2点に着目して本書を引用しつつ考察していく。

非市場領域の腐敗・墮落、金銭の腐食作用

ではまず1つ目に、なぜ市場が非市場領域を腐敗・墮落させてしまうのだろうか。

元々非市場領域である家庭生活、友情、生殖、健康、教育、自然、芸術、市民性、スポーツ、死等といったものは歴史的・文化的に蓄積された道徳的な社会規範によって意味が形成されていた領域である。そこには「善」が存在し、利他精神により規範が存在していた。

一方全ての物事は市場経済に組み込むことによって、誰もが効率的で幸福な生活を送ることができるという考え方の市場勝利主義がここ30年で急速に私たちの生活を支配するようになった。市場は利己的な世界だ。非市場領域とは相反するものである。この市場勝利主義がそれまで市場が侵入してこなかった非市場領域にまでその手を伸ばしてきたのだ。当初は道徳的観点から市場の侵入に抵抗していたのだが、時代を経るごとにその意識も薄まり今ではほぼ全体に市場が浸透し、お金でほとんどのものが買える時代になってしまった。そればかりではなく、市場的価値観が非市場領域をさらに浸食した。市場の論理と道徳の論理も市場領域と非市場領域のように相反する論理である。

市場の論理とは、経済効率・社会的効用を最大化することが目的であり、道徳的価値は全く考慮しない。商品化することで取引をする双方の利益・効用を最大にしようと努める

のが市場の論理である。

道徳の論理はこのような人間味がない市場の論理を主に 2 つの異論から非難する。非難をするといっても全ての市場においてではない。一般的な財・サービスの市場では何も非難する要素はない。本書であげている非市場領域を市場化した場合、本書の分を引用すると「お金で買うべきものと買うべきでないものをめぐる議論」— についてのみに非難している。

非難する際の 1 つ目の点は公正さに欠けるという異論。2 つ目の点は腐敗を招くという異論だ。— 「公正の観点からの異論は、市場の選択に反映される不平等について問いかける。腐敗という観点からの異論は、市場関係によって損なわれたり消滅したりする態度や規範について問いかける。」— と本文には書かれている。ある善の商品化（＝市場に組み込む）はその善の性質を変えてしまう。— 「市場はある一定の価値を体現しているのである、として市場価値は、大切にすべき非市場的規範を締め出してしまうことがあるのだ。」「非市場的な状況にお金を導入すると、人々の態度が変わり、道徳的・市民的責任が締め出されかねないということだ。」— と書かれてあるが、これが上で挙げた問いの答えになる。

金銭は腐食作用を持つ。そして利他精神で構成された非市場規範が、利己精神に塗り固められた市場規範に浸食されて、人々の道徳的・社会的「善」が消滅してしまうのだ。と、サンデルは本書全体を通して結論付けているのである。

私はサンデルの考え方に賛成である。私自身経済学・経営学という学問は上から目線の学問であり、まるで人間味がないように感じる。しかし逆に捉えると、感情を一切排除した学問であるために、市場経済を中心とした様々な社会のメカニズムを客観的に分析することができるのだとも思える。市場は常に変化するものであるので、その分析の仕方は時代によって全く違うものではあるが、アダム＝スミスが経済学を誕生させた 18 世紀後半以降、経済学は常に社会を分析してきた。今日までこの経済学が存続し続けているのは、経済学が人々にとって非常に重要だからである。だから私はどんなに批判されようと経済学は必要であると思う。

サンデルが経済学、とりわけ市場主義を批判しているのは、そこに道徳的価値観が皆無だからだ。インターネットが普及してグローバル化が進み、情報過多の時代に到来した今、社会は今まで以上の急速なスピードで複雑なものとなっている。市場もその波に乗り非常に複雑化したものとなるのは抗いきれない。その波が非市場領域にまで達しただけだと言われればそれまでだが、人間が人間という存在である以上どこかで市場主義の暴走を抑えなければならない。

金銭の腐食作用の事例

次に非市場領域が腐敗した事例を紹介する。

私は、本書を読むにつれて全てを金儲けの手段と考える人々が金の亡者に見え、怖いと

さえ感じた。特に「2章 インセンティブ」で事例として取り上げられている、「不妊への現金」という項目だ。薬物中毒の母親のもとに生まれた赤ん坊は、生まれた時から薬物中毒で、その多くが虐待されたり育児を放棄されたりすることになる。その予防プロジェクトとして—「薬物中毒の女性が不妊手術か長期の避妊処置を受ければ、300ドルの現金を与えようというのだ。」—と書いてある。本書では公正と腐敗双方の異論から批判がなされているが、そもそもそれを慈善事業として行っている人は本当にそれが善い行いであると感じてやっているのだろうか。確かに薬物中毒に母親のもとに生まれた赤ん坊は不幸だと思ふし、できれば女性に子供を産んでもらいたくなくとも思う。しかし、だからといって人の生殖機能を、金銭的インセンティブを用いてどうしようなどと考えつくだろうか。いや、普通の人ならば考えつかないであろう。私には甚だ理解しがたい。

この事例でさえ市場の理論からすれば反対する理由がないのである。なぜなら、どちらも同意の上で行っている行為であるし、市場取引的にもこれは双方に利益をもたらすとして何ら問題はない。社会的効用を増大させているからだ。しかし、人間が尊厳ある存在だとすれば、いかに同意の上であろうと人間のみならずの生きとし生けるものの象徴とさえいえる生殖機能をどうしようというのは間違っている。ましてやそれを慈善事業だとしてもビジネスとして利用するのは言語道断である。これは金銭的インセンティブがはらむ危険の一つといえよう。この行為は残酷だが、実際に行われているのだ。

これは「4章 生と死を扱う市場」のバイアティカル産業・ライフセトルメント産業といった生命保険の二次産業にも言えることだ。人の死は商品ではないし、望むものではないのだ。本書とは関係ないのだが、親族の間でも遺産相続の問題でトラブルはよく起きる。莫大な金銭が絡むと人は変わる。欲望を理性で抑えきれないからであろう。上の2つの事例に金銭の腐食作用が如実に表れている。

赤ん坊は愛情をそそぐ対象である。しかし一度市場に放り込めば赤ん坊はモノとして、商品としての対象に貶められる。人の死も同様に商品に貶められてしまう。本書には—「死を市場に出すことが、生命の尊厳と、そのかけがえのなさを支える価値観の体系を傷つけたのだ」—と記されている部分もある。ここに経済効率、社会的効用の増大が市場取引的には見られるのかもしれないが、サンデルが最も言いたいことは、道徳的・市民的「善」が存在するのであるか、ということである。

まとめ

以上の2つのことから私の考えをまとめる。

経済学がこれまでの市場の変化とともに変化してきたのであれば、今こそ更に変化すべき時だと思う。特に今は市場勝利主義がまかり通っているからなおさらである。2008年の金融危機により市場信譽は衰退したように思えたが、実際そんなことにはなっていない。経済学者たちは経済学にどっぷりつかっているために物事を分析するときに多少偏った見方ができてしまうと思う。なぜなら専門性が増せば増すほど、人間はその型にはまった考

え方しかできなくなってしまうからだ。それは全ての学問において言えることである。より多面的で柔軟な対応をすべきときには、経済学者だけの議論ではなく、経済学が専門ではない市民も巻き込んだ議論をすべきではないか。

また、私たちは既にこのような市場システムを当たり前のもと思いついで生活してしまっているのではないだろうか。私はしていると思う。何の疑問も持たず。どんなに残酷だと思うビジネスがはびころうとも、市場領域が非市場領域を腐敗させようとも、それを助長しているのは私たち市民であるのではないだろうか。

だからサンデルは本書を著したのではないだろうか。少しでも多くの人々に現在の市場経済の状況を知らせるため、そしてこの問題は市場経済で生活する全ての人間に関わる問題であり、私たち自身が考えなければならない問題であると知らせるために。

最後に、サンデルの言葉を引用してしめたい—「つまり、結局のところ市場の問題は、実はほかの人々ともにどう生きることを望むか問い問題なのだ。われわれが望むのは、何でも売り物にされる社会だろうか。それとも、市場では評価されずお金では買えない道徳的・市民的善というものがあるのだろうか。」—。

参考文献：「それをお金で買いますか 市場主義の限界」マイケル＝サンデル

早川書房

鬼澤 忍 訳